

平成 30 年 6 月 20 日現在

機関番号：32634

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02227

研究課題名(和文) 源氏物語と史実の連関に関する戦後の研究の総括と新見創出

研究課題名(英文) Summary of postwar research on the relationship between the Tale of Genji and historical facts and creation of new ideas

研究代表者

今井 上(imai, takashi)

専修大学・文学部・教授

研究者番号：00553752

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究によって、論文(単著)3本、著書(共著)1冊を公表した。戦後の『源氏物語』研究は、何を指し、どのような方法に基づいて、何を明らかにできたかを明確にすることをめざして研究を進めた。なかでも、これまで数多くの研究論文を生み出してきた『源氏物語』と史実の関係についての研究に焦点を絞り、その意義、方法的可能性と限界とを明らかにすることができた。准拠論に代表される、『源氏物語』と史実の関係について考察する研究が、今後どのように進められるべきかについても、方向性を示すことができたと考える。

研究成果の概要(英文)：Through this research, I published three articles (single author) and one book (co-authored). The postwar "The Tale of Genji" research summarized what we tried to clarify. Among others, I focused on <Research on Relationship between History and the Tale of Genji> and could clarify its significance, methodological possibilities and limits. I was able to clarify how future research on the relationship between "Genji Monogatari" and historical fact should be advanced

研究分野：日本文学

キーワード：源氏物語 史実 虚構 戦後の研究 古記録 准拠 モデル論 成立論

1. 研究開始当初の背景

准拠論に代表される『源氏物語』と史実との関係に関する研究は、こんにちに至るまで数多くの論文を安定的に生み出してきた『源氏物語』研究の主要分野である。

しかしそうであるがために、『源氏物語』が、どのような史実を、いかにとりいれているかということについては、さまざまな議論があって、意見の集約さえ容易でない、百家争鳴的状况を見せてもいる。またなかには、指摘があまりに細かな点に及んで、この物語の作者の紫式部が、そのような史実や歴史上の事件を本当に知っていたのかどうか、懐疑的にならざるを得ない場合も少なくない。

いたずらな議論の拡散を避けるべく、どこかで従来の研究を整理し、全体像を見渡す必要があるのではないか。それが、研究代表者が本研究を手掛けたいと考えた最大の動機である。

あるいはまた、次のような問題もある。すなわち、『源氏物語』と関わりのありそうな史実が仮に指摘できたとして、それが『源氏物語』全体の理解や文学史的展望とどのように関係し、従来の読みをどう更新しうるか、という点にまでかかわってこないのであれば、はたしてそれは何のための指摘であったか、ということが問題になってしかるべきであろう。しかしながら、従来の研究においては、物語と史実の接点を指摘するのみで、上記のような点を明確にできていないケースも、少なくなかったように思われる。この点に関しても、もう少し自覚的に研究が進められるべきではないか。

上記のような現状把握のもと、これからの『源氏物語』研究の可能性を模索するべく、戦後の、『源氏物語』と史実の関係についての主要な研究成果を総括する必要があると考えたことが本研究開始当初の背景である。

2. 研究の目的

戦後の『源氏物語』研究は、何を目指し、どのような方法に基づいて、何を明らかにできたかを明確にすることを最終的な目的として研究を進めた。なかでも数多くの研究論文を生み出してきた、『源氏物語』と史実の関係についての研究に焦点を絞り、その意義、方法的可能性と限界とを明らかにすることを目指した。

具体的には、『源氏物語』と史実の接点・共通点を指摘する際に、従来の研究が、両者の「部分的の二三の符合を言ふ」(手塚昇)程度の結果に陥っていないか、いくつかの主要論文にターゲットを絞って検証をおこなった。従来の研究に、方法的反省が求められる点があるとすれば、それはどのような点かを明らかにすることを第一の目的とした。

と同時に、もし仮に物語が准拠にしたとおぼしい人物・事件を指摘できたとして、それが作品の深い理解や鑑賞に結びついていか

ないのであれば、何のための検証であり、議論であったのか、ということになりかねない。そうした点が従来の研究に十分であったかについても、あわせて検証しようと考えた。以上2点を研究の目的として設定した。

3. 研究の方法

(1) 戦後の主要注釈書の見解の整理

『源氏物語』は、単なるフィクションではなく、歴史上の様々な事件や人物の事蹟を踏まえて描かれている点に大きな特徴を有すると、従来、論じられてきた。しかしながら、一步踏み込んで「物語のどの文脈に、いかなる史実が踏まえているか」、「『源氏物語』が、作品の枠組みとして前提にしている時代は、いつの時代なのか」といったことになると、研究者によって意見や立場がわかれ、近年では、ますます混沌とした状況を呈している。研究の現状を総括するための方策として、おもに、戦後に出版された複数の『源氏物語』の注釈書が、物語の史実を踏まえて書かれていると思われる文脈について、どのような注を付し、いかなる見解を示しているかを、網羅的に整理した対照表を作成することとした。そのことを通じて、従来の研究において、何がどこまで指摘され、検討されてきたかを明確に示すことが可能になると考えた。

(2) 戦後の研究史の整理

『源氏物語』と史実の関連についての研究が、何を指し、これからどのような可能性を有しているかを明らかにするためには、その他の研究方法との関係を明らかにする視点が不可欠である。具体的には、成立論、構想論、構造論、人物造型論、王権論などといった、戦後の主要な研究方法・アプローチと、『源氏物語』と史実との関係についての研究が、どのような関係を有し、どのように影響しあって展開してきたのかを、明らかにする必要があると考えた。そのような問題意識に基づいた、戦後を代表する研究論文・著書を、ひろく集め、ジャンル別・時代別に整理することを通じて、できるだけ詳細な戦後の研究史の記述を進めた。

上記のような作業を進めるのと同時に、それらにおける調査・分析に基づく考察を、雑誌論文等のかたちで発表するかたちで、研究を進めた。

4. 研究成果

(1) 『源氏物語』と史実との関係に関する研究は、こんにちに残された平安時代の歴史資料を参照しつつ、今後どのように進められてゆくべきか。それを考えるための試金石として、「賀茂祭の期間は悪霊が跳梁跋扈する時期であった」という『源氏物語』研究の分野でよく知られた見解の再検証をおこなっ

た。平安朝開闢以来の賀茂祭の記録をすべて当たり直し、従来の研究には見直すべき点があることを明らかにした。『源氏物語』の読解において、『権記』や『御堂関白記』などの同時代史料はどのように活用しうるかを考えた。その成果を『『源氏物語』若菜巻の賀茂祭 六条御息所の死霊と柏木の死』（東京大学国語国文学会『国語と国文学』93巻6号）にまとめた。

(2) 紫式部は、平安時代の歴史をどのように把握し、どのように作品世界に取り込んであるのかを明らかにすることは、重要な意味を有すると考える。戦後の研究を継承する、近年の研究においては、紫式部は、自身が生きた時代より200年ほど前の嵯峨天皇の時代、弘仁期あたりの史実をも把握し、作中に取り入れているのではないかと論じられることがあるが、果たしてそうした見解を認めてよいか、再検証した。その検証報告が、「紫式部の歴史認識 『源氏物語』の仁明朝」（京都大学文学部国語学国文学研究室『国語国文』85巻8号）である。

研究代表者としては、紫式部が、弘仁期の史実や文化を熟知していたと考えることには、諸般を考慮すると問題があると考え、天皇でいえば仁明天皇の時代、承和期の史実や出来事に、紫式部が高い関心を有していたらしいことを論じて、この物語作者の認知できたのも、そのあたりに留まると考えるのが穏やかではないか、との結論に達した。

(3) 戦後の研究を概観し、その意義を総括するためには、自ずと、戦前の研究とのつながりを明らかに知ることを求められる。ことに物語と史実との関わりについての研究の起源を明らかにするためには、科学としての国文学の確立を目指してきた明治時代以来の研究や、戦後、大変なブームを巻き起こした成立論議との、連続・不連続の諸相を詳らかにすることが求められる。そのような視点から、「古典学としての成立論 伊勢・うつほ・枕などとの対比」（竹林舎『制作空間の 紫式部（新時代への源氏学4）』）をまとめた。

『源氏物語』と史実との関係に関する研究と成立論とは、一見無関係のようにも思われるが、1950年代いっぱいまで流行したモデル論と成立論とは密接な関係があり、そのモデル論がやがて准拠論へと展開してゆくことを考えると、成立論の消長について考えることは『源氏物語』と史実との関係に関する研究の一環として重要な意味を有する。そうした立場から、上記成果を執筆した。

(4) こんにちの『源氏物語』研究の意義と特徴を明らかにし、戦後の研究の総括を行な

うことが、本研究の根本のモチーフである。「源氏物語と史実の連関に関する戦後の研究の総括と新見創出」と題した、本研究の本来の目的に立ち戻り、3年間の研究成果を総括する必要がある。

戦後以来の『源氏物語』と史実との関係に関する研究の展開をたどるなかで、1960年を一つの画期と見定め、それ以前の研究とそれ以後の研究とで何がどう変わったのか、『河海抄』の再評価や、モデル論議の終息・交代などのトピックにそって、戦後の『源氏物語』研究の一つの総括を行なった。

戦後の研究の総括という点では、紙幅の都合もあって、なお不十分な点もあるが、現在の研究のルーツがどこにあるかを確認することで、議論ぜんたいの正当性と問題点を明らかにし、今後の『源氏物語』と史実との関係に関する研究が、ひいては『源氏物語』の研究それじたいが、どのような方向に進むべきかを考えることができた。分析と検討の結果を、『『源氏物語』研究の現在 「歴史的研究」の来し方行く末（東京大学国語国文学会『国語と国文学』95巻5号）にまとめた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

1, 今井 上「『源氏物語』研究の現在 「歴史的研究」の来し方行く末」（東京大学国語国文学会『国語と国文学』、査読無、95巻5号、2018年、103 - 117頁）

2, 今井 上「紫式部の歴史認識 『源氏物語』の仁明朝」（京都大学文学部国語学国文学研究室『国語国文』、査読有、85巻8号、2016年、1 - 16頁）

3, 今井 上「『源氏物語』若菜巻の賀茂祭 六条御息所の死霊と柏木の死」（東京大学国語国文学会『国語と国文学』、査読有、93巻6号、2016年、20 - 34頁）

[学会発表](計0件)

[図書](計1件)

1, 今井 上他12名、土方洋一、松岡智之他編、『制作空間の 紫式部（新時代への源氏学4）』、竹林舎、査読無、2017年、290 - 320頁）

〔産業財産権〕

出願状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

今井 上 (Imai Takashi)
専修大学・文学部・教授
研究者番号：00553752

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()